

## SuMPO環境ラベルプログラム 意見公募結果報告書

報告日		2023年3月3日			
意見公募実施期間		2023年2月15日 ～ 2023年3月1日			
PCR原案受付番号		PDE-197			
製品の属する分類		建築物 【第6版】			
意見番号	NO.	該当項目	御意見の内容	御意見の理由	御意見に対する考え方
1		2-2 機能	「耐用年数（供用年数）」との記載があるが、両者は同じ意味か。	「耐用年数」は定義されていますが、「供用年数」は定義されていない。	供用年数を下記のとおり"4-1用語および定義"に追記し、算定時に供用年数を把握することは困難なため「（供用年数）」の記載を削除しました。  供用年数：竣工から実際に建築物が当該用途で使用された年数
2		2-3 算定単位（機能単位）	算定単位が1棟・耐用年数または延床面積・耐用年数となっているが、評価を耐用年数にするか供用年数にするか選択可能にする必要はないか。		意見番号1の回答のとおり、供用年数は「竣工から実際に建築物が当該用途で使用された年数」と定義するため、算定時に供用年数を把握することは困難なため、機能単位には含めないこととしました。  評価時に供用年数を想定して評価期間を設定する「計画供用年数」を用いることも想定されますが、定義として「計画供用年数」と「耐用年数」を同じように扱ってよいことを"4-1用語および定義"に追記しました。
3	2-1, 2-2	3-1 引用規格および引用PCR	「引用規格および引用PCRはない。」とする理由を明記すべきではないか。 また、日本建築学会：「建物のLCA指針-温暖化・資源消費・廃棄物対策のための評価ツール（改訂版）」(2013)、同地球環境委員会LCA小委員会：「建築物のLCA実施における評価の目安（案）」(2022)は、建築物（躯体および仕上げ材）【第5版】での「引用」から「参考」となっている。その理由はなにか。 【第5版】での残りの引用規格についても、参考としない理由はなにか。		【第5版】で示していた文献等はいずれも参考文献としての位置づけであり、本節で規定することが意図されている規格、PCRではないと判断し、「引用規格および引用PCRはない。」と表現しました。また、【第5版】では「引用」と「参考」を区別せずに用いられていましたが、本改定版では区別して表現するように修正しました。"3-1"で記載していない各文献につきましては、それぞれ引用もしくは参考としている各シナリオで出典を記載しております。
4		5-2 カットオフ基準およびカットオフ対象	カットオフ基準およびカットオフ対象について、規制基準を超えて含有される有害性および毒性を有するものは、カットオフ対象としないことを加えてはどうか。	建築材料のPCRにおいて同様の記述があり、カットオフ対象としていないため。	ご指摘のとおり追記いたしました。

5		5-3 ライフサイクルフロー図	ライフサイクルフロー図で「エンボディドカーボン」が初めて登場する。この用語を4-1に定義した方が良い。		ご指摘のとおり追記いたしました。
6		6-3 一次データの収集方法	「全段階に共通して適用する算定方法」にて、「金額データを用いてもよい。」とあるが、この場合、同じ材料、同じ物量でも、金額によりCO2排出量に差異が生じること、また、物価変動の影響も受けるため、公平な評価が難しいと考える。また、金額データを採用する項目が任意のため、人によりバラツキが出ることも公平性に欠けることになるため、物量データを使用することを原則とすべき。		ご指摘の点を踏まえまして、「原単位データが金額あたりであるものを除いては物量データを使用することを原則とする」に修正いたしました。ただし、実態において、物量データを収集することが困難な材料も想定されることから、6-7シナリオにおいて、ご指摘の物価変動や金額データ採用による公平性が損なわれないことに留意しつつ金額データを使用してもよいシナリオを追記しました。
7		7-4 シナリオ	リユース材の採用にあたっては、環境負荷は計上しないことにしているが、リユース材の施工に関わる輸送などの負荷はカットオフとしてみなすということによろしいか。		ご指摘のとおり、リユース材の施工に関わる輸送などの負荷も、ライフサイクル全体への影響が少ないことが明確なため、カットオフとしても良いことを追記いたしました。
8		7-4 シナリオ	リサイクル材（電炉材など）の採用時に、原料となる元材料（高炉材など）製造時の負荷の反映方法の決めが必要ではないか。		リサイクルの配分方法を考慮する場合には様々な考え方が想定されるため、本PCRで規定することは困難と判断しました。そのため、リサイクルの配分方法について特別な考え方をを用いて評価する場合には、算定者自身がシナリオを策定し、その妥当性について検証を受けることを補足しました。
9		9-1 使用段階に適用する項目	「修繕」と言う単語が繰り返し出てくるが、「修繕」と「修理」は微妙に意味が異なる。それを踏まえて、関係図書にも「修繕」が使われているため、「修繕」を使っているという理解でよろしいか。		ご記載のとおり、参考としている関係図書等と表現を合わせて「repair = 修繕」という表現を用いました。

10		10-4 シナリオ	<p>「コンクリートの比重」と書かれているが、SI単位系のJIS規格では「比重」ではなく、「密度」を使うことになっており、他のJIS規格もその様に改訂したはず。それを踏まえて、「比重」を使うべきなのか今一度確認してほしい。本項以降では、「比重」ではなく、「密度」が使われていることも違和感がある。</p>		<p>ご指摘のとおり、SI単位系のJIS規格に準拠して修正いたしました。</p>
11		附属書Cの表	<p>単位などが斜体で書かれている。数値の単位の間半角スペースも入っていない。量記号等のJIS（量記号は斜体、単位記号は原則として直立体）に準拠していないように思う。</p> <p>附属書Bは、一箇所を除き、規格に準拠している。附属書Eの量記号は斜体になるべき。改めて確認して、必要に応じて修正すべき。</p>		<p>ご指摘のとおり、量記号等のJIS規格に準拠して修正いたしました。</p>